

「タワラグミの生えていた新潟市学校町浜」

安達 ユリ子

私は学校町の生まれです。当時は今のように、設備のととのった遊ぶ所も少なく、毎日川辺、松林、砂浜、海など自然の中で遊んで来ました。

小学校から帰ると母は「行くよ。」と声をかけるときまって海岸近くのいろんな木々の生えている山へ行くのです。水道局（今は日赤センター）を左に見ながら、松波町のバス通りを横切ると、もうそこは緑の濃い松林が見わたすかぎり広がっておりました。右手の林の中には山番の管理人さんの家が見え山には自由に入れないよう鉄条網で囲いがしてありました。でも番家から道を20mほどたどった先は、草がボウボウで高さが2m位あり、そこから山には簡単に入れます。道の近くにはいろいろな雑木が生えておりました。

秋になるとこの林にはイグチ類のアワタケ（アミタケ？）、ハツタケ、ベニタケ、ショロ、砂モグリ（シモコシ？）などが沢山生えて、ハツタケは手をふれると銅さびの緑青色に変色するので、小さな頃よりよく憶えています。

キノコは不思議と母より私の方がよく見つけ沢山取るのです。

海岸に向い歩を進めると道の両側には、ジンゲ場（ゴミ捨て場）があり、4・5人の人達が鉄とガラス、真鍮（アカガネ）などをより分けていました。

左手の林のとぎれた方には、グライダー小屋もあり、そこから海辺までは遠く、子供の足では真夏などやけた砂浜を一気かけぬける事が出来ず、2・3度ゲタなどで湿った砂を掘り起し、そこでしばらく足を冷し、休み休み走った後海水に足をつけました。あの足裏に残るやけどをしそうな暑さは、今でもなつかしく思いおこします。一番上の姉の話によると、かつてあのあたりはオカヒジキ、ハマボウフウ、月見草（アレチマツヨイグサ）、雨アサガオ（ハマヒルガオ）などが沢山生えており、その陰になった所の冷えた砂地で足を休めたとの事でした。

秋になるとグミを取りに行くのがいつも母と私の2人でした。松林をすぎると、砂丘の上近くまで一面グミ林です。実の表面には白い点々が沢山ついていて、色は赤というよりオレンジがかったいて、口の中に入れようものなら、顔がクシャクシャとなり歯茎まで渋がいっぱいついて、とても食べられ

るしろものではないと憶えています。母はそのグミでグミ酒を作ったようです。私はよく憶えていませんが、その中でも背の高さ1m ぐらいの木で、砂の中からチョットだけ“私はここにありますよ”とばかりに赤く大きな実をつけるグミがありました。それはとても甘く、サクランボのようなおいしさで、見つけるとアツクヨ、アツクヨと宝物を見つけたように母を呼び、他にはないかと丁寧に見るのですが、数は少なく今でたとえるなら、マツタケのようなものです。「これはね“タワラグミ”と言うのだよ。」「どうして？」と聞くと「米俵の形をしているからだよ。」と教えてくれました。

今、あのあたりは道を挟んで一方は、野球場、他方はマリンピア日本海の駐車場になっているようです。グライダー小屋の所は、もう道なのか海なのか。

先日、数十年ぶりに学校町浜へ行き、子供の頃の思い出がなつかしく、タワラグミをもう一度食べてみたいと、ふるさとをなつかしんで帰ってきました。

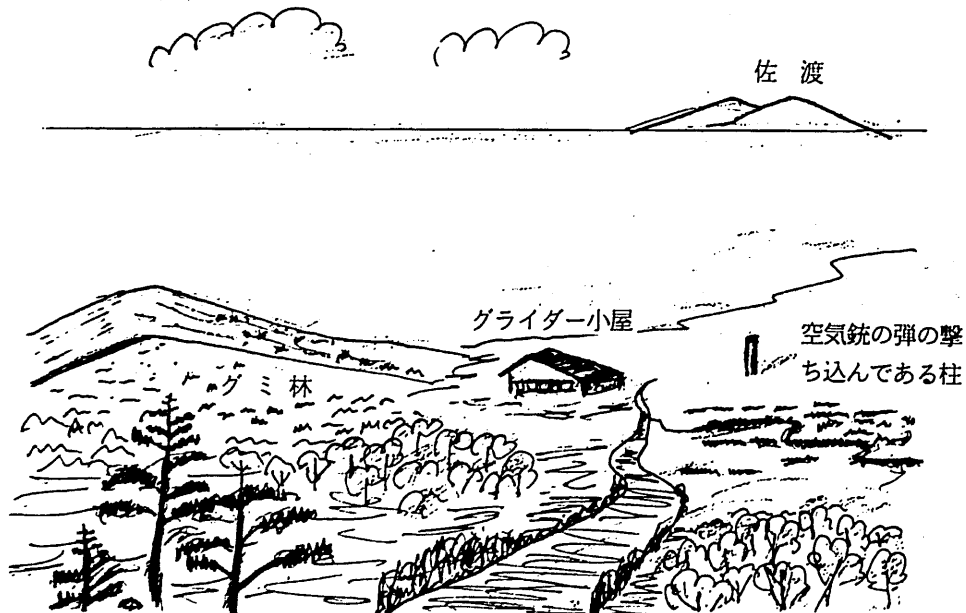


図1. 記憶をたどって画いた昔の新潟市学校浜